

Title	心理臨床における居場所(Abstract_要旨)
Author(s)	中藤, 信哉
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2016-03-23
URL	https://doi.org/10.14989/doctor.k19448
Right	学位規則第9条第2項により要約公開
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

京都大学	博士（教育学）	氏名	中藤 信哉
論文題目	心理臨床における居場所		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本研究は心理臨床における「居場所」について扱ったものである。</p> <p>まず第一章では、「居場所」概念の成立過程について、文献を通じて歴史的に検討している。その結果、「居場所」が今日のように「安心でき自分らしくいられる場所」という心理的意味を含むようになった経緯として、1950 年以降社会問題となった不登校と、その支援として 1980 年以降のフリースクールの設立が関係していること、更に、古語の検討を通じて、「居場所」という語が、近代以降、自己の存在の基盤のメタファーとして使用される文脈があったことが指摘された。</p> <p>第二章では、「居場所」概念の成立過程と日本の文化的心性との関連について、「対人恐怖症」と「甘え」の概念に着目しながら理論的に検討されている。共同体や集団との関係において「自分」を成立させる日本人の主体にとって、所属する「場」の喪失は危機的状況となる。学校という「場」を喪失する不登校において、「居場所」という代替的な「場」が提供されるようになったことの文化的必然性が論じられた。</p> <p>第三章では、「居場所のなさ」について、青年期を対象とした調査が実施された。その結果、「居場所のなさ」が、他者との異質性と疎外感を体験することで個人に生じるものであり、「いること」の自明性が揺らぐ実存的危機であることが明らかにされた。同時に、「いること」の揺らぎは自己形成の途上にある青年期の個人にとっては肯定的側面を持つものであることも指摘されている。</p> <p>第四章では「自分」という主体と「居場所」との関係が論じられている。Winnicott, D.W.の理論を援用し、「居場所」が、個人の「依存」を抱える環境であり、「本当の自分」として「いること」を可能にする場所であること、更に、「居場所」における身体性についても検討された。さらには、「居場所」があることとアイデンティティの感覚の関連についても論じられている。</p> <p>第五章では、依存を切り口として、心理臨床における「居場所」の諸相が提示されている。すなわち、「自分」という主体が「いること」を保障するために治療者から提供される、物理的・身体的側面も含んだ抱える環境としての「居場所」の相、治療者という他者への依存が失敗に終わるプロセスにおいて、クライアントの「本当の自分」が抱えられる「居場所」の相、外的環境における「居場所」を喪失した実存的危機にあるクライアントが、自己を再編し再び現実社会の中で「居場所」を見出していくための移行を抱える場としての「居場所」の相があることが論じられた。</p> <p>最後に第六章においては、現代的状況における「居場所」のありようについて検討することで、現代を生きる我々の心性について考察された。インターネット上に見出される「居場所」と、「キャラ」を演じることで確保される「居場所」について検討し、それらが現代の若者にとって重要な意味を持ちつつも、身体性を欠き、否定的・病理的な「自分」を他者から受容される契機に乏しいこと、また、自己の固有性が排除された交換可能なあり方を個人に迫るものであり、それらは現代的な心性の特徴であることが指摘された。一方で、クライアントとセラピストという身体を伴う具体的二者関係において、否定的・病理的な「自分」を抱えられながら、固有の生を歩むことを支える「居場所」としての心理療法の意義もまた、改めて確認された。</p> <p>以上の議論を通じて、曖昧さが伴う「居場所」概念に関する理解の深化を目指すとともに、心理臨床実践における「居場所」概念の射程が明らかにされた。</p>			

(論文審査の結果の要旨)

本研究は心理臨床における「居場所」について扱ったものである。

「居場所」という日常用語を切り口として、曖昧さが伴う「居場所」概念に関する理解の深化を目指すとともに、心理臨床における「居場所」のもつ意味を探ろうとしている。

心理臨床において、クライアントによって語られる言葉は「日常語」であり、その言葉がもつ意味を吟味し、かつ、深化させることは重要な意義をもつと考えられる。

加えて、「居場所がない」といった「居場所」をめぐる語りは、しばしば現れるものであり、かつ深刻性をもつ重要な概念である。

本研究がそうした日常語を切り口としている点、また、「居場所」という、なじみがありながらこれまでしっかりと取り上げられてこなかった概念を改めて扱った点が評価されると考えられる。

本研究では、まず、「居場所」概念の成立過程について、文献を通じて歴史的に検討し、「居場所」が今日のように「安心でき自分らしくいられる場所」という心理的意味を含むようになった経緯として、1950年以降社会問題となった不登校と、その支援として1980年以降のフリースクールの設立が関係していること、更に、古語の検討を通じて、「居場所」という語が、近代以降、自己の存在の基盤のメタファーとして使用される文脈があったことが指摘された。さらに本研究では、「居場所」概念の成立過程と日本の文化的心性との関連について、「対人恐怖症」と「甘え」の概念に着目しながら理論的に検討されている。「居場所」概念について、こうした歴史的、文化的側面から丁寧にたどった点もまた評価された。

さらには、「居場所のなさ」について、青年期を対象とした調査が実施され、実証的研究が行われている。その結果、「居場所のなさ」が、他者との異質性と疎外感を体験することで個人に生じるものであり、「いること」の自明性が揺らぐ実存的危機であることが明らかにされた。同時に、「いること」の揺らぎは自己形成の途上にある青年期の個人にとっては肯定的側面を持つものであることも指摘された。

また、第四章では「自分」という主体と「居場所」との関係が論じられ、Winnicott, D.W.の理論を援用し、「居場所」が、個人の「依存」を抱える環境であり、「本当の自分」として「いること」を可能にする場所であること、更に、「居場所」における身体性についても検討された。さらには、「居場所」があることとアイデンティティの感覚の関連についても論じられている。こうした、実証的研究と理論的考察の両者からの「居場所」に関する検討も適切なものであると評価された。

続いて第五章では、依存を切り口として、心理臨床における「居場所」の諸相が明らかにされた。そして最後に、現代的状況における「居場所」のありようについても検討された。インターネット上や、「キャラ」を演じることで確保される「居場所」について、身体性を欠き、否定的・病理的な「自分」を他者から受容される契機に乏しいこと、また、自己の固有性が排除された交換可能なあり方を個人に迫るものであり、それらは現代的な心性の特徴であることが指摘された。

こうした現代的状況に関する考察は現代的意義をもつ一方で、クライアントとセラピストという身体を伴う具体的二者関係において、否定的・病理的な「自分」を抱えられながら、固有の生を歩むことを支える「居場所」としての心理療法の意義もまた、改めて確認された点が評価される。

本研究におけるこうした評価点の一方で、「居場所」をめぐる論考のなかで、ダイナミクスを入れ込んだ視点が欠如しているという指摘がなされ、また、「実存的問い」としての「居場所」のなさに関する議論への疑問が出された。さらに、臨床例や個人的

体験が挙げられていたらより多面的にテーマを深められたという指摘もあった。しかし、こうした指摘は本研究のさらなる発展性を視野に入れたものであり、本研究の価値をいささかも下げるものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 28 年 2 月 23 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第 14 条第 2 項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定) 当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降